

●作品について

子供の頃から枯れ凋むものがなんだか好きだった。
生きているうちは平気で傷つけてしまうこともあるのに、なぜ枯れて死んでいる様子に惹かれたりするのだろうか。

私は北海道のランドスケープを作品化することに取り組んでいます。その制作過程で冬の大地に見えてきたのがこのシリーズです。私の住む北の地に自分を惹きつける枯れ凋む植物たちがじっと死んだように佇んでいました。いやしかし、死んでいるさまというのはこれまでの記憶なのか、それともこれからの展望なのか。

私は宗教家ではありませんが寺巡りをすることで仏教の考えに通ずるものに気付きます。輪廻転生。植物もきっとその生涯を終えると何かに生まれ変わる準備に向かっているのかもしれないと考えることで希望が湧いてきます。その姿は死でも生でもなく命の境目なのではないかと考えると、この厳しい時代に彼らを通し何か展望が見えてきます。
たいてい葉は落ちきり、動物で言う骨格が露出し研ぎ澄まされ、死んでもなお存在感ある彼らの肖像を作品化し、植物を通し生の希望を考える機会にしたいと考えます。

雪解けとともにその姿は消えてなくなります。唯一手元に残せた写真から彼らの声を感じとれたら、届けられたらとおもいます。一枚一枚生まれたのが北の大地である証拠にアイヌの言葉から作品名をいただき添えました。

●プリントについて

一つ一つの存在感は無影の条件で撮影することではっきりしてきましたが、さらに覆い焼きすることでプリントの奥へ視線を運ばせ、より植物の肖像を魅せるかたちを形成しました。
単色でシンプルに仕上げるその絵からは日本的「wabi-sabi」を伝えられたら、枯れ行くモノの美を表現出来たらと考えます。

